

# 近代中国農業史

—— その数量的側面 ——

おの 尾 上 悦 三

- I 研究の目的と方法
- II 近代中国農業史推計
- III 既存の研究成果による検討
- IV 結語

## I 研究の目的と方法

アヘン戦争以後中華人民共和国の成立までの110年間、すなわち中国の近代といわれる期間において中国の農業生産高と耕地面積がどのように推移したかを推計するのが本稿の目的である。

そもそも中国近代史、さらには中国近代経済史の研究はきわめて進んでおり、これまでに多くのりっぱな研究業績がたくわえられた。ただ、経済史のマクロ数量的側面にはまだ多くの未開の領域が残されているように思われる。そのような認識の下における第1の作業として人口史の研究がなされた<sup>(註1)</sup>。第2の作業として行なわれたのがここにかかげる農業史である。

中国近代農業史をマクロ数量的にとらえようとするものにとって直接のてがかりとなるものは主につぎの三つである。すなわち、(1)清朝政府の記録、(2)J・L・バックによってなされた調査、(3)国民党政府の調査、である。

後で説明するように、(1)は直接の根拠とはなり難い。(2)と(3)は第2次大戦直前のものであって、それが有用であっても、アヘン戦争までさかのぼるための基礎的數字とはなりにくい。そこで、こ

こでは全く異種の仮設的モデルを提示し、これらの資料をその仮設をチェックするための補助的材料としたい。

われわれの仮設は以下のような方法によって導出された。まず、土地利用の数量的側面と各種生産物の生産量は1957年に関して最も完全な形で与えられている。それらのデータを収集整理する作業はすでに大部分が完成され、現在利用可能である<sup>(註2)</sup>。これをいわば橋頭堡として、backward projectionを行なう。変化率は各種の断片的なデータや間接的な資料、換言すれば近代中国経済史より類推する。これは、先の中国人口史の研究において1953年のセンサスをもとにして人口を推計したのと同じ手法である。

われわれの推計においてかぎとなっている仮定の一つは、食糧生産高が1840年から1957年までの117年間、人口数と同じ比率で増加したということである。換言すれば、この期間において中国の1人当たり食糧生産高、さらにいえば1人当たり食糧消費量は一定であったとする。これはD・パーキンスがその書『中国農業発展史』<sup>(註3)</sup>において用いた手法と基本的に同じである。小文では、1957年の食糧生産のデータと、われわれの推計による近代人口のシリーズを用いて食糧生産高のシリーズを導出する。

耕地の推計は独立の方法によって行なう。その

際、人口におけると同じ理由により、中国全体を中国本部と東北地区にきりはなして行なう。

この小文における研究の目的はアヘン戦争以後新中国成立までの期間における農業史のマクロ数量的データを再構成することにあるのであるが、得られたものは「推計結果」とよぶには根拠が薄弱すぎる。それゆえに「仮設」と名づけたわけである。中国農業史、さらには近代中国史全般にかかわる研究にたずさわる専門の研究者からの御教示によってこれを再検討し、改善していきたいと考える次第である。

(注1) アジア経済研究所の作業結果。その要約は、板垣、川野、山本編『アジア経済の発展構造』(勁草書房 1977年)に所収の拙稿「近代中国人口史」。

(注2) 拙稿「中国農業の地域構造」(中国資本蓄積研究会編『中国の経済発展と制度』アジア経済研究所 1976年)。

(注3) Perkins, Dwight H., *Agricultural Development in China, 1368-1968*, Chicago, Aldine Publishing Co, 1969.

## II 近代中国農業史推計

まずわれわれの作業の方法と結果を提示することからはじめる。既存の研究成果のサーベイおよびそれらとの比較検討は次節において行なう。

われわれの作業における基本的なアイデアはすでに述べたところであるがそれを構成する上で前提となっている変数や仮定は以下の通りである。

(1) 農業生産高と耕地面積に関するデータは1957年に関して最も豊富であり、しかも良質である。同年における省別の各種農産物生産量および耕地の利用状況に関するデータが公表資料の中から筆者自身によってすでに収集整理されているので(注1)、これを利用する。

(2) 1840年以後1957年までの全期間において、

食糧生産量は人口数と同じ速度で増加したと仮定する。「食糧」を構成している各種作物のウェイトには変化があったが、合計量で見れば、1人当たり食糧生産高、さらには1人当たり食糧消費量は常に一定であったということにする。1949~57年の期間についてもそのようにみなすのであるが、それは1949~56年に関する中国の公式統計を放棄することを含意している。

(3) 全期間において人口1人当たりの食糧生産量を300キログラムであるとみなす。中国の統計概念においては「食糧」は米(もみ)、小麦、雑穀、薯類(重量を4分の1に換算)からなるが、ここではこれに大豆を加える。1957年の公表食糧生産量(プラス大豆生産量)を同年末の人口で割れば301.6キログラムである。

(4) 1840年から1950年までの期間における人口の推移については筆者自身の推計結果があり、これを利用する。そこでは四つの仮定にもとづく四つのモデルがつくられたが、最も現実的とみられるモデルIが用いられた。

(5) 人口推計においては全地域を中国本部と東北地区において考察したが、ここでも同様の措置をとった。耕地面積については特別の考慮が必要であった。この期間において、中国本部における耕地面積の拡大は微々たるものであったのに対し、東北地区におけるそれはめざましかったと考えられるからである。ただ、1人当たり食糧生産高は両地域において常に同じであったと仮定した。公式統計による両地域の1957年の食糧生産高をそれぞれの人口数で割ると異なった数字が得られる。東北の1人当たり食糧生産高は中国本部のそれより高い。それゆえに1957年についてはわれわれの「仮設的数字」と実数とを併記した。

(6) 中国本部、すなわち東北地区を除いた地域

における耕地面積の増加率は以下の通りであったとみなす。19世紀半ばまでに容易に開拓できる土地はほとんどすべて開拓され、それ以後における耕地の拡大は少なかった。また、太平天国における人口の減少は耕地面積の縮小をももたらした。

1840～1850年：1%増加  
 1850～1865年：2%減少  
 1865～1890年：過去の水準を回復  
 1890～1935年：3%増加  
 1935～1945年：1%減少  
 1945～1950年：増減なし  
 1950～1957年：3%増加

1957年の耕地面積：9,512万ヘクタール

(7) 東北地区の耕地面積は以下のような速度で増加したとみなす。

1840～1940年：食糧生産増加率の5分の4の速度で増加  
 1940～1950年：増減なし  
 1950～1957年：食糧生産増加率の3分の2の速度で増加

1957年の耕地面積：1,671万ヘクタール

(8) 1957年において「食糧」と大豆の作付面積は全作付面積の85.0%を占めた。この作付面積の比率をわれわれの耕地面積の比率にそのまま適用し、耕地の85.0%がわれわれの食糧生産のために用いられたとみなす。さらに、この比率が全期間において一定であったとみなす。

(9) 食糧生産量の増加分の中、耕地面積の拡大によって説明されない部分は単位面積収量の増大によってもたらされたものとみなす。作付面積はここでは取上げないので、多毛作指数の上昇による増産は単位面積収量の増大の中に吸収される。

(10) 食糧の中に含まれる各種作物のシェアはと

りあげなかった。次節においてこれに関してなされた既存の研究を簡単に紹介しておく。

さて、以上の仮定をもとにして得られた計算結果の主要なものは第1表のとおりである。また、第1表の諸数字のもととなった計算結果は第2、3表のとおりである。

第1～3表の諸数字が示すもののいくつかを分かりやすくするために第4～6表を作成した。これは諸数字の変化がお互いにどのように関連しているかをあらわしている。

第4～6表を言葉で言えば以下ようになる。

(1) 全中国について言えば、1840年、すなわちアヘン戦争当時の中国の人口は4億2027万人で、

第1表 近代中国農業史主要指標 (1840～1957年)

年	人口数 (万人)	食糧生産量 (万トン)	耕地面積 (万ヘクタール)	食糧生産に 用いられた 耕地 (万ヘクタール)	単位面積 収量 (トン/ ヘクタール)
1840	42,027	12,608	9,100	7,735	1.630
1845	42,236	12,671	9,145	7,773	1.630
1850	42,446	12,734	9,190	7,811	1.630
1855	41,298	12,389	9,129	7,760	1.597
1860	39,808	11,942	9,069	7,709	1.549
1865	38,868	11,660	9,052	7,694	1.515
1870	39,728	11,918	9,131	7,761	1.536
1875	40,588	12,176	9,209	7,828	1.555
1880	41,448	12,434	9,287	7,894	1.575
1885	42,308	12,692	9,364	7,959	1.595
1890	43,168	12,950	9,442	8,025	1.614
1895	43,915	13,175	9,512	8,085	1.630
1900	44,571	13,371	9,582	8,144	1.642
1905	45,577	13,673	9,671	8,220	1.663
1910	46,643	13,993	9,833	8,358	1.674
1915	47,719	14,316	9,973	8,477	1.689
1920	48,855	14,657	10,108	8,592	1.706
1925	50,201	15,060	10,273	8,732	1.725
1930	51,559	15,468	10,433	8,868	1.744
1935	53,276	15,983	10,586	8,998	1.776
1940	54,113	16,234	10,659	9,060	1.792
1945	54,757	16,427	10,612	9,020	1.821
1950	55,196	16,559	10,612	9,020	1.836
1953	58,260	17,478	10,818	9,195	1.901
1957	64,653	19,396 (19,500)	11,183	9,508	2.040 (2.051)

(注) 人口数は1953年央数字より算出したゆえに、各年央を示している。ただ、1957年のみは年末数字によった。1957年の食糧生産高および単位面積収量は「仮設的数字」であって、カッコ内数字は実数である。

第2表 中国本部主要指標

年	人口数 (万人)	食糧生産高 (万トン)	耕地面積 (万ヘクタール)	食糧生産に 用いられた 耕地 (万ヘクタール)	単位面積 収量 (トン/ ヘクタール)
1840	41,727	12,518	8,967	7,622	1.642
1845	41,936	12,581	9,012	7,660	1.642
1850	42,146	12,644	9,057	7,698	1.643
1855	40,998	12,299	8,996	7,647	1.608
1860	39,508	11,852	8,936	7,596	1.560
1865	38,468	11,540	8,875	7,544	1.530
1870	39,228	11,768	8,912	7,575	1.554
1875	39,988	11,996	8,948	7,606	1.577
1880	40,748	12,224	8,984	7,636	1.601
1885	41,508	12,452	9,020	7,667	1.624
1890	42,268	12,680	9,057	7,698	1.647
1895	42,915	12,875	9,087	7,724	1.667
1900	43,571	13,071	9,117	7,749	1.687
1905	44,277	13,283	9,147	7,775	1.708
1910	45,043	13,513	9,177	7,800	1.732
1915	45,819	13,746	9,208	7,827	1.756
1920	46,655	13,997	9,238	7,852	1.783
1925	47,601	14,280	9,268	7,878	1.813
1930	48,559	14,568	9,298	7,903	1.843
1935	49,876	14,963	9,328	7,929	1.887
1940	50,313	15,094	9,282	7,890	1.913
1945	50,457	15,137	9,235	7,850	1.928
1950	51,296	15,389	9,235	7,850	1.960
1953	53,885	16,166	9,354	7,951	2.033
1957	59,503	17,851 (17,522)	9,512	8,088	2.207 (2.166)

(注) 第1表に同じ。

1950年のそれは5億5196万人であった。その110年間に31.3%増加したことになる。1840~1900年の増加率は6.1%であり、1900~50年のそれは23.8%である。そして1950~57年のそれは17.1%である。これらの数字からいえば、19世紀後半におけるきわめて徐々たる変化、20世紀前半におけるやや加速された増加、中華人民共和国成立以後の飛躍的な増加、とよぶことができる。ただ、19世紀後半においては太平天国による人口の減少とその回復の期間があったことをつけ加えておくべきであろう。食糧の生産高はこの人口の動きに応じて増加していったとみなす。

(2) 全国の耕地面積は1840年に9100万ヘクタール、1950年に1億612万ヘクタール、この期間の増加率は16.6%であった。1840~1900年の増加率

第3表 東北地区主要指標

年	人口数 (万人)	食糧生産高 (万トン)	耕地面積 (万ヘクタール)	食糧生産に 用いられた 耕地 (万ヘクタール)	単位面積 収量 (トン/ ヘクタール)
1840	300	90	133	113	0.796
1845	300	90	133	113	0.796
1850	300	90	133	113	0.796
1855	300	90	133	113	0.796
1860	300	90	133	113	0.796
1865	400	120	177	150	0.800
1870	500	150	219	186	0.806
1875	600	180	261	222	0.811
1880	700	210	303	258	0.314
1885	800	240	344	292	0.822
1890	900	270	385	327	0.826
1895	1,000	300	425	361	0.831
1900	1,100	330	465	395	0.835
1905	1,300	390	524	445	0.876
1910	1,600	480	656	558	0.860
1915	1,900	570	765	650	0.877
1920	2,200	660	870	740	0.892
1925	2,600	780	1,005	850	0.913
1930	3,000	900	1,135	965	0.933
1935	3,400	1,020	1,258	1,069	0.954
1940	3,800	1,140	1,377	1,170	0.974
1945	4,300	1,290	1,377	1,170	1.103
1950	3,900	1,170	1,377	1,170	1.000
1953	4,375	1,313	1,464	1,244	1.055
1957	5,150	1,545 (1,978)	1,671	1,420	1.088 (1.392)

(注) 第1表に同じ。ただカッコ内数字のうち、食糧生産量を導出する上で、吉林省の大豆生産量が得られず、遼寧省の大豆単位面積収量と吉林省の作付面積をかけて算出した。(拙稿「中国農業の地域構造」)〔中国資本蓄積研究会編『中国の経済発展と制度』アジア経済研究所 1976年〕)。

は5.3%、1900~50年のそれは、10.7%、1950~57年のそれは、5.4%であった。この三つの期間における増加率の一般的趨勢は人口のそれに似ているが、人口の場合におけるほど顕著ではない。

(3) 全国平均でみた食糧の単位面積収量は1840~1950年の110年間に12.6%上昇した。1840~1900年の増加率は0.7%、1900~50年のそれは11.8%であった。19世紀後半には単位面積収量の増加はほとんどなく、20世紀前半には相当な増加があったということになる。そして1950~57年のそれは11.1%というきわめてめざましいものであった。

(4) もう少し短い期間にわけてみると次のよう

第4表 増加率：全国 (%)

期 間	人 口 食糧生産高	耕地面積	単位面積収量
1840~1850	0.5	1.0	0
1850~1865	-8.4	-1.5	-7.1
1865~1900	14.7	5.9	8.4
1900~1935	19.5	10.5	8.2
1935~1950	3.6	0.2	3.4
1950~1957	17.1	5.4	11.1
1840~1900	6.1	5.3	0.7
1840~1950	31.3	16.6	12.6

第5表 増加率：中国本部 (%)

期 間	人 口 食糧生産高	耕地面積	単位面積収量
1840~1850	1.0	1.0	0.1
1850~1865	-8.3	-2.0	-6.9
1865~1900	13.3	2.7	10.3
1900~1935	14.5	2.3	11.9
1935~1950	2.8	-0.1	3.9
1950~1957	16.0	3.0	12.6
1840~1900	4.4	1.7	2.7
1850~1950	22.9	3.0	19.4

第6表 増加率：東北地区 (%)

期 間	人 口 食糧生産高	耕地面積	単位面積収量
1840~1850	0	0	0
1850~1865	33.0	32.5	0.5
1865~1900	175.0	163.1	4.4
1900~1935	209.1	170.9	6.3
1935~1950	14.7	9.3	3.4
1950~1957	32.1	21.4	11.1
1840~1900	266.7	248.6	2.5
1840~1950	1,200.0	933.1	12.6

になる。1840~1900年に人口と食糧生産は6.1%、耕地面積は5.3%、単位面積収量は0.7%増加した。1900~35年に人口と食糧生産は19.5%、耕地面積は10.5%、単位面積収量は8.2%それぞれ増加した。1935~50年にはそれぞれ、3.6%、0.2%、3.4%それぞれ増加した。1950~57年には17.1%、5.4%、11.1%それぞれ増加した。太平天国の影響は、人口・食糧生産-8.4%、耕地面積-1.5%、単位面積収量-7.1%であった。そのすべては1850~65年の間に起こり、1890年までに回復した。地理

的にみればすべて中国本部内のできごとである。

(5) 各期間における食糧生産増加率と耕地面積の増加率との間のギャップは単位面積収量によって埋められたとしよう。すなわち、食糧増産のうち耕地増加率によって説明できない部分は単位面積収量の果たした貢献であるとしよう。そのように考えると両者の関係は第7表ようになる。

1840~1950年における食糧生産の増加のうち、53.0%が耕地増により、47.0%が単位面積収量の増加によってもたらされた。すなわち、両者の貢献の度合いはほぼ同じであったといえる。ただ、1840~1935年においては耕地増が約3分の2、単位面積収量が約3分の1を負担した。それ以後は形勢が逆転し、単位面積収量の増加が、食糧増産の大部分を説明するようになった。

(6) しかしながら、このようなマクロ的数字は異なった地域における異なった変化の状況を平均的に示しているにすぎない。

1840~1950年の110年間に中国の耕地面積は1512万ヘクタール、すなわち16.6%増加したことになるが、そのうち1244万ヘクタール、すなわち増加分の82.3%は東北地区において実現された。すべての点で圧倒的なウエイトを占める中国本部における耕地の増加は、全中国における増加分のうち17.7%を占めるにすぎない。

第7表 食糧生産増加の原因 (%)

期 間	食糧増産率	うち耕地増によるもの	うち単位面積収量の増加によるもの
1840~1900	100 ( 6.1)	66.3	33.7
1900~1935	100 (19.5)	60.3	39.7
1935~1950	100 ( 3.6)	5.6	94.4
1950~1957	100 (17.1)	31.6	68.4
1900~1965	100 (23.8)	45.0	55.0
1840~1950	100 (31.3)	53.0	47.0

(注) 各期間における増加率を100とする。カッコ内数字は実際の増加率。

(7) 中国本部のみをとれば、110年間に人口・食糧は22.9%増加し、耕地面積は3.0%増加した。すなわち、増産率のうち耕地面積の拡大は13.1%を負担し、残る86.9%は単位面積収量の増大によってもたらされたということになる。この傾向は20世紀前半においていっそう著しくなった。

(8) それに対し、東北地区のめざましい人口増加は、その大部分が耕地面積の拡大によって支えられた。同地区の耕地面積は19世紀の後半に約3.5倍となり、20世紀の前半世紀に3.0倍となり、その1世紀間に10.3倍となった。そして人口・食糧生産高は13.0倍となった。

(9) 以上にあげた東北地区は1957年の境界線にもとづくそれである。もし、拡大された現在の境界をとるならこのような傾向はいっそう明白なものとなろう。さらにいえば、新しいフロンティアである西北地区をもこの「東北地区」に含ませるなら、さらに顕著となるかも知れない。

(10) 19世紀後半以後第2次大戦時にいたるまでの期間における東北地区の人口増加、さらには農業の発展はめざましいものがあつた。そしてその大部分は耕地の拡大と結びついていた。

(11) 以上の諸点から以下のようにいうことができる。すなわち、19世紀半ばまでに、中国本部内においては容易に開拓できる土地はすべて開墾しつくされていた。それゆえにそれ以後における食糧の増産の大部分は単位面積収量の増大に依存しなければならなかつた。他方、19世紀半ばにおいて東北地区は広大なフロンティアであつた。それまで「立入禁止地域」であつたこの地区は、ロシア人の東進、ついには侵略に対処するために移民を奨励した。ここにおいて人口の急増、食糧の増産、耕地の拡大が爆発的なものとなつた。しかしながら、20世紀半ばにおいてこの地域内において

も「未開の沃野」は消滅することとなつた。新中国における、すなわち1950年以後における人口の急増は、当然食糧生産の急増を要求する。新政府は1950年代前半において東北地区内における開墾に若干の努力を払つたがその効果は顕著なものではなかつた。それゆえに新中国における人口の急増は、単位面積収量の急増を要求することとなつた。

(12) 1957年の食糧生産に関する公表統計からみると、東北地区の1人当たり食糧生産高は全国平均のそれよりも高く、中国本部のそれはより低い。それゆえに仮設値と実績値は一致しない。考えられることは、一つには東北地区の1人当たり食糧消費量が中国本部のそれにくらべてより多いかも知れないということである。中国本部では米と小麦の比率が高いのに対し、東北では大豆と高粱など雑穀の比率がより高いところからこの説明が説得的である。ただ、食糧の国内移動に関する正確なデータが得られないので、それを確認することができない。また、外国に輸出される大豆の多くが東北産のものであるように思われる。対外貿易の占める比率はきわめて少ない故にわれわれの作業結果に重大な影響を及ぼすものではないが、これを無視したわれわれの作業には一応理論上の誤差があるといふことができよう。

(13) われわれの作業において、1人当たり食糧生産高、すなわち各年食糧生産高を各年人口で割つた値を一定としている。1957年の301.6キログラムから類推して300キログラムとした。この値をとることの是非については次節で検討するところであるが、これについて一言つけ加えれば、これはきわめて高い値であり、特に19世紀のそれとしては高いものである。しかも1970年代前半における中国の実績がほぼこの水準にある。

(注1) 拙稿「中国農業の地域構造」。

### III 既存の研究成果による検討

以上の一連の推計結果を現存のデータやこれまでになされた他の研究成果によってチェックするのが次のわれわれの課題である。それを以下において問題別に行なう。

(1) 人口のシリーズについて。この作業結果が別の場所で公表されているので(註1)、その基本的なアイデアだけを簡単に紹介しておく。

まず、1950年以前になされた調査や推計の諸結果をすべて放棄する。1953年のセンサスで5億8260万という数字がでていのに、それ以前の「3億人か4億人か」などという議論の多くは無意味であると考えられるからである。そこで、1953年のセンサスの結果より backward projection によっていくつかのシリーズをつくった。その方法は次のとおりである。中国の人口を三つの部分に分ける。すなわち、①東北地区人口、②中国本部の近代セクター内人口、③中国本部の伝統的セクター内人口、以上である。①の東北地区人口はK・スン(註2)とW・ワイン Jr.(註3)の研究結果をもとにして直接推計した。本稿第3表の東北地区人口史はその結果である。

②の中国本部の近代セクター内人口は次の方法で求められた。すなわち、上海市の人口史と1953年の省別都市人口比率に関するくわしいデータが利用可能である(註4)。これによって推計した。結果のみをいえば、この部分の人口は1840年ゼロ、1855年10万人、1900年100万人、1950年1600万人、1953年1827万人であった。

③の中国本部の伝統的セクター内人口は圧倒的部分を占めるにもかかわらず、推計が最も困難である。そこで、19世紀後半と20世紀前半の人口増加率に関してこれまでになされたすべての調査記

録を参考にした。しかしそれでも唯一の説得的なものを導き出すことは不可能で、結局四つの代替的なケースを描きだした。それは第8表のとおりである。このような比率と1953年のセンサス結果を用いて逆算して四つのシリーズを作成した。本稿において用いられたもの、すなわち第1表と第2表の基礎となっているものはモデルIによって導かれたシリーズである。事実はモデルIとモデルIIの中間にあるというのが筆者の感想である。ただ、一つを選ぶとなればモデルIを選びたいということである。そこではアヘン戦争当時における中国の人口総数が4億2027万人となっている。現在までになされた諸研究の結果からみて、アヘン戦争当時における中国の人口を4億人前後とみるのが常識的判断であろう。

(2) 1人当たり食糧生産量について。本稿において、1人当たり食糧生産量、すなわち食糧生産量を人口数で割った単純平均を一定とした。すなわち全期間において300キログラムであったと仮定した。しかもそれは1957年の公表値である301.6キログラムからとったものである。問題を、300キログラムという水準のそれと、長期にわたって一定としたことの二つにわけて検討してみよう。

最初に発生する問題は、1949～56年の食糧生産高に関する公式統計をどうするかの問題である。同期間の1人当たり食糧生産高(大豆を含む)は公式統計によると第9表のとおりである。

第8表 中国本部の伝統的セクター内人口増加率

期 間	モデルI	モデルII	モデルIII	モデルIV
1840～1850	1‰/年	2‰/年	3‰/年	0
1850～1864	-300 万人/年	-300 万人/年	-300 万人/年	-300 万人/年
1864～1890	+150 万人/年	+150 万人/年	+150 万人/年	+150 万人/年
1890～1937	3‰/年	5‰/年	7‰/年	0
1937～1945	1‰/年	3‰/年	5‰/年	0
1945～1950	3‰/年	5‰/年	7‰/年	0

第9表 公式統計による1人当たり生産高(単位: kg)

1949年	209.0
1950	237.7
1951	253.7
1952	285.1
1953	283.2
1954	282.8
1955	300.3
1956	306.5

新中国成立直後の数年間における農業生産統計が現実にくらべて低すぎるということは多くの学者によって指摘されてきたところであって、ほとんど疑いをいれる余地がない。中国自体もそれを認めている(注5)。しかしそれでは実際にはどの水準にあったかとなると誰も言うところを知らない。具体案を出したのはT・C・リュー、K・C・イエである(注6)。彼らは、1949年以後1957年まで、食糧生産高の増加率が人口のそれと同じであったと推定した。これはやや極端な例であるが、1957年の1人当たり食糧生産水準が歴史的にみて特に高いものであったとは思われないところから、リュー・イエの考え方を採用した。もし1950年代前半において300キログラムより低かったとすれば、それは例外的なできごとであったとみなす。

これをチェックするために、まず戦前における二つの調査結果と対比することができる。これはJ・L・バックの調査と国民政府のそれである(注7)。農家人口1人当たり年間穀物消費量は前者(1929~33年)においては270キログラムであり、後者(1937年)においては296.4キログラムであった。そして別の角度からなされた調査では、全国生産量のうち、個人的消費に用いられるものの比率はそれぞれ84.7%および85.7%であった(注8)。

D・パーキンスは1368年、すなわち明の初年以後の中国農業史を数量的にとらえようとした(注9)。パーキンスは1950年以前における各種の記録、および新中国20年間の諸記録を検討した上

で、1368~1950年の1人当たり穀物生産量を285キログラムで終始一定とした。

1970年代前半、さらには現在の1人当たり穀物生産量はほぼ300キログラムであったように思われる。1976年の穀物生産量を2億7000万トンとし、人口を9億人とするならば、1人当たり生産量はちょうど300キログラムとなる。1970年代において中国はきびしい食糧不足に悩まされているようにはみえないが、それでも国内ではきびしい配給制度が機能しており、また中国は1960年代初頭より終始穀物の純輸入国である。それゆえに1人当たり生産水準が解放前にくらべて特に上昇したという証拠をみつけることは困難である。また逆に、貧困な人々の生活が以前にくらべて改善されていることはあきらかであって、それゆえに現在の水準が解放前の水準よりも低いということはいっそうあり得ないことである。

A・エクスタインは1930年代の中国と明治初期の日本の農業生産水準を比較する(注10)。その結論は、19世紀および20世紀前半における中国の土地および労働の生産性が明治時代の日本のそれにくらべて高かったということである。

多くの調査結果や研究成果は単純平均によってみた1人当たり食糧生産量が20世紀前半と後半では大差がないことを示唆している。すなわち、食糧の増産、とりわけ新中国における急速な増産もすべて人口の増加によって吸収されたわけである。ただ、19世紀に関してはいくつかの研究があるがそれらはすべて叙述的となる。1人当たり食糧生産高を一定、それも300キログラムとすることについてそれらの叙述的な資料はいずれも異議をとねえるものではない。しかしながら積極的に支持するといえるほどのものではない。われわれの作業結果が「仮設」の域を脱しえない最大の理



由の一つがここにある。

(3) 耕地面積について。耕地面積に関して19世紀にまでまたがるデータとして最初にあげるべきものは清朝の記録である。そして1900年以前に関して具体的な数字を与えている「原資料」としてはこれが唯一のものである。東北地区をも含めた19世紀の耕地統計は第10表のとおりであった。

すでに多くの人が指摘しているように、これは統計的概念による面積ではなく、「課税面積」である。ここでは現実の状況に比べてはるかに少ない値となる。その間のギャップを実際に調査した例がある。バックのそれである(注11)。バックによれば、「上海近くの揚子江三角州の4県の土地調査による既耕地面積は以前の課税面積より12.6%ないし35.3%大きく、平均して22%大きかった」。また、「156県の県公署から獲られた(官庁統計の)既耕地面積は……(実測面積の)78%, 77%, 80%であることを示した」という。

清朝の土地統計の性格についてはくわしい研究があるのでそれを紹介するのが適当であろう。P・ホーのそれである(注12)。その要点は次の3点である。①清朝の土地登記にあらわれる数字は実際の面積ではなく課税面積であるが、両者の間をつなぐ換算比率は土地の質である。肥沃な土地は高い比率で、劣悪な土地は低い比率で課税面積に換算される。②税負担額、すなわち課税面積が一度きまるとそれ以後急増させないという原則がある。③未登記の土地が存在する。たとえば新しい開墾地を免税にした場合がある。また、軍閥や官僚などの有力者の土地は多くの場合未登記である。

以上のような理由から、清朝の土地統計は利用できないことが明らかである。傾向を知るためのてがかりとしても不十分であるように思われる。

近代的な意味における土地調査が1930年頃に国

第10表 清朝の土地統計

年	面積(万ヘクタール)
1812	5,276.0
1851	5,144.2
1873	5,135.7
1887	5,651.7

(出所)『中国近代農業史資料』第1輯 1840～1911年 三聯書店 1957年 60ページ。

(注) 資料は畝の単位で与えられている。これを15分の1ヘクタールとして換算したが、1.085畝を1市畝とする旧畝かも知れない。

第11表 国民政府、バック、新中国政府の数字  
(単位: 100万ヘクタール)

1931～1937 <sup>(1)</sup>	N A R B*	80
1931～1937 <sup>(1)</sup>	N A R B修正値	102
1929～1933 <sup>(1)</sup>	バック『土地利用』	102
1946 <sup>(2)</sup>	国民政府農林部統計局	94
1952 <sup>(3)</sup>	国家統計局	108
1957 <sup>(3)</sup>	国家統計局	112

(出所) (1) Buck, J. L., O. L. Dawson and Y. L. Wu, *Food and Agriculture in Communist China*, New York, Washington, Praeger, 1966, p. 10 より再録。

(2) Shen, T. H. *Agricultural Resources of China*, Ithaca, Cornell Univ. Press, 1951, p. 142.

(3) 『偉大な10年』

(注) \* NARB: National Agricultural Research Bureau の略。

民政府とJ・L・バックによって行なわれた。さらに、国民政府は1946年のものを発表している。まずそれらの結果を示すと、第11表のごとくである。

これらの諸数字の基礎データをここでくわしく説明する必要はない。これについてもホーの検討を紹介するのが適当であるように思われる(注13)。

ホーによれば、国民党政府の調査は近代的な意味における耕地の統計である。しかもこれは地方政府から寄せられたものを集計したものではなく、独自の調査員を配置して得たものである。ただ、えられた結果の多くが清政府の統計と奇妙に一致したところがあるゆえに、調査がどれだけほんとうに行なわれたか疑わしいという。バックの調査は、ホーによれば、最高である。そして1952年に発表された新中国の土地統計がバックの「最

も高い推計値」と奇妙に一致しているという。新中国の政府が正確な調査によらずにバックの調査結果を利用したのではないか。もし正確な調査が行なわれるなら、中国の耕地面積はもつとはるかに広大であるかも知れない、という。

国民政府の調査およびバックの調査がわれわれの目的に利用できるものではないことがあきらかである。ただ、1957年の統計をいわば橋頭堡として利用するわれわれにとって、それに対しても根本的疑問をなげかけるホーの所説はこのさいさけて通る以外にないであろう。

次に、研究者が既存の資料などを利用して印象的にまとめた耕地面積の傾向を紹介しよう。これらは確固たる基礎をもつものではないが、いずれも常識的判断であるゆえに、われわれの作業をチェックするにはより有効であるように思われる。

まず、嚴中平は次のように言う(註14)。「抗日戦争前、中国耕地面積は大体14億畝から15億畝の間であった。19世紀の70年代以後、新開墾区(とくに東北各省)を除けば耕地は一般に拡張がなかった。東北を除けば、1873~1933年の60年間に耕地面積は1%増加したのみである。1893~1933年には増加がなかった。蒋介石の時代には減少した。」これは、新中国の経済史家の見解を代表するものかも知れない。われわれの第2表においては、中国本部の耕地面積は1875~1935年に4.2%増加し、1935~45年に1%減少したことになっている。われわれの表では太平天国による減少があって、その回復効果があるゆえに前者の増加率が高くてでているが、いずれにしても1935年以前の増加率に対して嚴中平はきわめて悲観的であるといえよう。

国民政府もほぼ同様の見解をもっていたようである(註15)。第12表の示すように、1870年から1933年までの間に耕地は1%増加をみたという。

パーキンスのとりあげる範囲はわれわれのものと一致する(註16)。彼によれば、「19世紀までに中国には容易に耕せるフロンティアはなくなっていた。1957年までの100年間に耕地は約40%増加した。しかしそのうちの80%は満州、内蒙、その他の西北地方という劣質地であった」。われわれの第1表において1957年までの100年間の増加率は22.5%である。そして全増加分のうち74.9%が東北3省において実現されたということになる。

バックの資料は異なった角度からわれわれに検討の素材を提供している。彼は農家1戸当たり平均の作付面積を与えている。それは第13表のとおりである。1870年から1930年までの60年間に1戸当たり作付面積は32.8%減少した。小麦地帯では37.2%の減少、稲作地帯では7.5%の増加である。今かりに、農業依存人口比率および農家1戸当たり平均人口数がこの期間において一定であったと仮定しよう。その場合にはわれわれの人口1人当たり耕地面積、つまり全耕地面積を人口数で割った値、の変化率は、概念上これと比較可能となる。われわれの1人当たり耕地面積は同期間において12.0%の減少である。これのみによって具体的な数字

第12表 耕地の増加率(1870年=100)

1870年	100
1873	100
1893	101
1913	101
1933	101

第13表 農家1戸当たり平均作付面積

(単位:ヘクタール)

	報告された地域の数	1870	1890	1910	1930
全中国	55	1.37	1.35	1.06	0.92
小麦地帯	29	1.75	1.77	1.32	1.10
稲作地帯	26	0.67	0.81	0.77	0.72

(出所) Buck, J. L., *Land Utilization in China, Statistics*, Shanghai, 1937, p. 288.

第14表 全国食糧生産高において各種作物が占めるシェア (%)

データ	米 (もみ)	小麦	雑穀	いも	合計
1949年以前					
『統計月報』1929-32	42.6	18.5	36.7	2.3	100.0
NARB 1931-37*	38.7	17.7	38.2	5.3	100.0
NARB 修正値1931-37	39.8	18.0	37.1	5.1	100.0
合成推計 1929-33**	39.5	15.8	38.5	6.2	100.0
バック『土地利用』 1929-33	49.1	13.3	32.1	6.0	100.0
1949年以後					
1949	45.0	12.8	33.1	9.1	100.0
1950	44.2	12.8	34.2	9.9	100.0
1951	44.9	12.8	32.0	10.4	100.0
1952	44.3	11.7	33.4	10.6	100.0
1953	45.4	11.7	32.3	10.6	100.0
1954	44.2	14.6	30.7	10.6	100.0
1955	44.6	13.2	31.4	10.8	100.0
1956	45.2	13.6	29.2	12.0	100.0
1957	46.9	12.8	28.4	11.8	100.0

(出所) これは J. L. Buck により整理されたものをもとにして作成した。第11表(出所)の(1)に同じ(ただし, p. 58)。1949年以後は公式統計。

(注) \* NARB: National Agricultural Research Bureau の調査。

\*\* NARB の耕地面積とバックの得た単位面積収量から推計し、これに東北、新疆、西康の推計値を加えたもの。

を云々することはできないが、ほぼすべての研究者によって容認されている事実、すなわちこの期間における人口圧力の増加は明白となっている。

(4) 作物種類の変化について。まず、調査結果にもとづく具体的な数字で与えられているものは第14表と第15表のとおりである。

第14~15表について簡単な説明を加えよう。

第1に、これらはいずれも大豆を含んでいない。大豆は1957年に食糧と大豆の作付面積合計の8.1%、生産高の5.1%を占めていた。19世紀後半から20世紀前半にかけて大豆の栽培が急増してこのような比率を占めるようになった。そして大豆の急増は東北地区の開拓と強く結びついている。

第2に、二つの表において1949年以後の諸数字は安定的である。米は作付面積において25%前後、生産量において45%前後、小麦はそれぞれ22

第15表 食糧作付面積における各種作物が占めるシェア (%)

データ	米 (もみ)	小麦	雑穀	いも	合計
1949年以前					
『統計月報』1929-32	24.8	26.3	46.4	2.5	100.0
NARB 1931-37	22.7	24.8	48.3	4.2	100.0
NARB 修正値1931-37	23.4	25.1	47.5	4.0	100.0
合成推計 1929-33	21.7	22.7	50.6	5.0	100.0
バック『土地利用』 1929-33	28.8	20.8	45.2	5.2	100.0
1949年以後					
1949	25.3	21.2	46.7	6.9	100.0
1950	24.9	21.8	46.0	7.3	100.0
1951	25.1	21.6	45.5	7.8	100.0
1952	25.3	22.1	44.9	7.7	100.0
1953	24.8	22.4	44.9	7.9	100.0
1954	24.7	23.1	43.8	8.4	100.0
1955	24.7	22.6	44.3	8.4	100.0
1956	26.8	22.0	42.4	8.8	100.0
1957	26.7	22.7	41.9	8.7	100.0

(出所) 第14表と同じ(ただし, p. 56より作成)。

%前後、12%前後、雑穀はそれぞれ30%前後(やや下降きみ)、40%あまり(下降の傾向があきらか)、いもはそれぞれ10%前後(上昇きみ)、8%前後(上昇の傾向)、を占める。

第3に、1949年以前の推計結果はお互いに相当な相違を示している。バックの調査結果が最良であるというのが多数意見である。しかしこれをもとにしてそれ以後の変化をたどろうとしてもほぼ無意味なようである。これらの表からわれわれの作業目的にあうような手がかりを得ることは不可能であろう。

第4に、第14、15表における雑穀の項をさらに細分することが可能である。それぞれの資料はそれを与えている(註17)。ここではそれらに立入らないことにする。

作物別の動向について一つのてがかりを与えるものはバックの調査である。それは20世紀初頭以後、日中戦争前までの期間における趨勢を示している。第16表がそれである。

第16表の示すところは、大麦、高粱、あわから、とうもろこし、綿花、甘藷、ごま等への転換がみ

られる。一般的に換金作物の増加がみられる。ただ、われわれの食糧の中で最も重要な項目である米と小麦は安定的である。

19世紀末の輸出統計は東北地区からする大量の大豆と高粱の輸出を伝えている。19世紀の第3四半期まで(1887年まで)中国の輸出の最重要品目は茶であった。それ以後絹がとってかわった。19世紀末から20世紀はじめにかけて大豆とその他の換金作物の作付面積が増加したことは明白である。

(5) 耕地の地域別変化傾向について。われわれの推計においては東北地区の増加が顕著であった。しかしこれも実証数字はない。旧満州地区の耕地推計がはじまったのは20世紀に入ってからであり(註18)、調査とよべるようなものがはじまったのは1910年代においてである。中国本部に関しては国民政府の推計数字があるのでそれを紹介する

と、第17表のごとくである。

第17表によれば、19世紀後半より第2次大戦直前まで中国本部の耕地面積はほとんどかわらなかった。ただ、地域によっては若干の変動がある。

最も大きい増加は雲南と青海の両省であるが、それらはいずれも絶対値が少ないゆえに全体に与える影響は少ない。1957年においても雲南省の耕地は全国の2.5%、青海省のそれは0.5%を占めるにすぎなかった。貴州、湖北、江西等がそれにつづく。減少したものも数多く、浙江省、福建省はとくにひどい。アヘン戦争などの影響もあるだろうが、統計上の問題も含まれているかも知れない。なお、第17表の編者(嚴中平等)は、1933年の耕地面積の数字が事実にくらべて大きすぎ、1933年のそれは1913年のそれよりも少なかったと説明している。

第16表 作付面積の変化  
(1904-1909年~1929-1933年)

	報告の あった 地域の 数	報告された地域内における 全作付面積のなかで占める 比率(%)			
		1904- 1909	1914- 1919	1924- 1929	1929- 1933
作付面積が増加した かまたは不変であ った作物					
蚕豆	7	9	9	9	9
とうもろこし	22	11	14	16	17
綿花	29	11	14	18	20
アヘン	13	14	3	11	20
落花生	18	9	8	11	11
なたね	5	15	21	27	28
米	17	40	41	37	40
大豆	7	4	8	10	9
大麦	7	8	9	10	8
甘藷	18	10	11	12	13
小麦	29	26	27	27	27
作付面積が減少した 作物					
大麦	10	24	23	20	19
藍	12	10	7	2	...
高粱	14	26	23	20	16
苧麻	15	22	18	17	17
甘蔗	10	7	6	5	6

(出所) バック著、塩谷、仙波、安藤訳『支那の農業』改造社 昭和13年 263ページ (Buck, J. L., *Land Utilization in China*, Shanghai, 1937)。

第17表 省別耕地面積の変化(1870~1933年)  
(1870年=100)

	1870	1893	1913	1933
総計	100	101	101	101
察哈爾	100	104	112	104
綏遠	100	95	93	88
寧夏	100	100	102	99
青海	100	169	175	203
甘肅	100	116	117	118
陝西	100	98	95	91
山西	100	103	110	110
河北	100	98	100	98
山東	100	103	105	99
河南	100	99	117	115
江蘇	100	101	102	110
安徽	100	106	107	107
浙江	100	102	73	78
福建	100	96	92	81
廣東	100	101	101	102
江蘇	100	99	93	91
湖北	100	104	109	128
湖南	100	88	89	88
四川	100	105	117	123
雲南	100	102	104	110
貴州	100	111	133	331
廣西	100	115	121	130

(出所) 国民政府と金陵大学の共同作業であるが、ここでは嚴中平等編『中国近代經濟史統計資料選輯』科学出版社 1955年 357ページより再録。

(注1) 拙稿「近代中国人口史」。

(注2) Sun, Kungtu, *The Economic Development of Manchuria in the First Half of the Twentieth Century*, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1969.

(注3) Wynne Jr., Waller, *The Population of Manchuria* (U. S. Bureau of the Census, International Population Statistics Reports, Series P-90, No. 7), 1958.

(注4) 尾上悦三『中国の産業立地に関する研究』アジア経済研究所 1971年 第3章および第7章。

(注5) 『統計工作通説』No. 21 1957年 23頁。

(注6) Liu, T. C. and K.C. Yeh, *The Economy of the Chinese Mainland: National Income and Economic Development, 1933-1959*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1965.

(注7) Buck, J. L., O. L. Dawson and Y. L. Wu, *Food and Agriculture in Communist China*, New York, Washington, Praeger, 1966.

(注8) *Ibid.*, p. 11.

(注9) Perkins, *op. cit.*

(注10) Eckstein, Alexander, *China's Economic Development*, Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1975, pp. 135-137.

(注11) バック著、塩谷、仙波、安藤訳『支那の農業』改造社 昭和13年 200-201ページ (J. L. Buck, *Land Utilization in China*)。

(注12) Ho, Ping-ti, *Studies on the Population of China, 1368-1953*, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1959, chap. 6.

(注13) *Ibid.*, chap. 6.

(注14) 蔵中平等編『中国近代経済史統計資料選輯』科学出版社 1955年 354ページ。

(注15) Department of Agricultural Economics, National Agricultural Research Bureau, *Crop Reporting in China, 1934*, Nanking, 1936, pp. 48-53.

(注16) Perkins, *op. cit.*, p. 27.

(注17) NARB, おなわち国民政府のデータは T. Shenによって整理され、後に出版されたので現在利用可能である (Shen, T. H., *Agricultural Resources of China*, Ithaca, Cornell Univ. Press, 1951)。

(注18) 旧満州耕地の推計を最初にはじめたのは天野元之助であって、その結果は『満洲経済之発達』大連 1932年に示されている。

## IV 結 語

第II節において近代中国における農業史のマクロ数量的側面に関する若干の推計を試みた。得られた結果は一つの仮設とよぶべきものである。今後の研究や中国経済史家からの御教示によって改善したいと考えるしだいである。第II節の結論の主なものは以下のとおりである。

(1) アヘン戦争当時、中国本部内にはフロンティアは殆どなく人口圧力がたえがたいほどのものとなっていた。四川省への移住、漢江流域の開拓という歴史的事実はこの時まで完成していた。

(2) 人口圧力が極限に達した頃に太平天国が起こった。このとき、最も肥沃な地域において人口圧力が減少したが、同時に耕地の荒廃があった。その回復のためには長い年月が必要であった。

(3) 19世紀後半以後、東北地区の開拓があり、人口増加、耕地増加、農業生産の増加などがあった。

(4) 東北地区の開拓が一段落した頃、日本の侵出、第2次大戦がはじまって、農業の発展は停滞することとなった。

(5) 大平天国で減少して以後、人口の増加はとどまるところを知らなかった。そして農業生産はそれにつれて発展した。しかしそれにみあう耕地面積の拡大はなかったゆえに農家1戸当たり平均保有地面積は縮小した。それを相殺するものは単位面積収量の増加であった。

(6) 新中国において人口が急増するようになったが、農業生産高はそれにつれて急増した。そしてその大部分は単位面積収量の増大に負っている。人口1人当たり食糧生産高が300キログラム前後であると仮定した本稿の基礎数字は、1970年代の現在にもそのままあてはまる。

(調査研究部主任調査研究員)